

2026 年 2 月 15 日午前 10 時 30 分

降誕節第 8 主日 主日礼拝

司会 徳島恵子
奏楽 川名ひさ子

讃美歌・詩編交読・信仰告白では起立をしますが、
お立ちになりにくい方は、座ったままでどうぞ。

(平和のあいさつ)

前 奏

招きのことば ゼカリヤ書 14:6-9a

讃美歌 18「心を高くあげよ」 一 同
交読詩編 125:1-5(P.147/143)

祈 り 司会者
《関東教区お祈りカレンダー》
熊谷教会 行田教会 愛泉教会
(主の祈り)

讃美歌 456「主が手を取って起こせば」 一 同

聖 書 旧約:ヨナ 1:4-16(P.1145)
新約:マルコ 4:35-41(P.68)

メッセージ『舟の中で眠る人々』
祈 り 川上 盾 牧師

讃美歌 469「善き力にわれ囲まれ」 一 同

献 金 一 同
(献金感謝の祈り)

信仰告白(インドネシアの信仰告白①②) 一 同

頌 栄 26
祝 祷 川上 盾 牧師
後 奏
報告・紹介

＜招きのことば＞ゼカリヤ書 14:6-9a

その日には、光がなく、冷えて、凍てつくばかりである。しかし、ただひとつの日が来る。その日は、主にのみ知られている。そのときは昼もなければ、夜もなく、夕べになっても光がある。その日、エルサレムから命の水が湧き出で、半分は東の海へ、半分は西の海へ向かい、夏も冬も流れ続ける。主は地上をすべて治める王となられる。

《2月礼拝当番》 植松みよ 徳江由利
大川原恵子 岩渕育雄
猿谷富子 長谷川瞳

《今週の集会・行事》

- ◎ 本日 15:00 群馬地区委員会(前橋中部)
- ◎ 本日 17:00 CS慰労会(焼肉こまれ)
- ◎ 16 日(月) 地区教師会(高崎教会)
- ◎ 17 日(火) 牧師、共愛中高礼拝、育心こども園
- ◎ 18 日(水) 灰の水曜日 レントに入る
- ◎ 19 日(木) 10:30 婦人会例会
- ◎ 21 日(土) 10:00 会堂清掃 D 組

《次週の主日》

- ◎主日礼拝 10:30 レント第一主日
- メッセージ『神との関係の回復』
- 聖書:旧約:エレミヤ 31:27-34(P.1236)
新約:マルコ 1:12-15(P.61)
- 讃美歌 311(1-3), 311(4-6), 440, 312(5)
- 交読詩編 91:1-13(P.105/101)
- 司会:岩渕デボラ 奏楽:木戸恵美子
- 聖餐式 <讃 312(1-3)>
- ◎ CS午後礼拝 13:30 礼拝後、スタッフ会議

《予 告》

- ◎ 3 月定例役員会 3/1(日) 礼拝後
- ◎ 聖研祈祷会 3/4(水) 10:30 & 19:30

《報 告》

◎ 今週よりレント(受難節)に入ります

18 日(水)は「灰の水曜日」、教会暦ではこの日からレントに入ります。イエス・キリストの十字架への歩みを覚える 40 日間が今年もやって来ます。レントキャンドルの火を一本ずつ消しながら、イエス・キリストの苦難を覚えます。このような営みは決して心地よいものではありませんが、キリスト教信仰の大切な一部分を担っている習慣です。レントの期間、昔は肉食や卵を断つなど、自らに禁欲を課す習慣もありました。その期間が始まる前に、最後の食べ治めをしておこうと始まったのがカーニバル(謝肉祭)です。今週火曜日までが世界各地のカーニバルの最高潮の季節となります。40 日のレントの期間が明ければイースター(復活祭)。今年のイースターは4月6日です。イースターに受洗・転入会を希望される方は牧師までお申し出下さい。

◎ 群馬地区 2.11.集会

高崎教会を会場に行なわれ、51 名(12 教会)の参加者がありました。大阪より村山盛忠さん(隠退教師)をお招きし、半世紀に及び関わって来られたパレスチナ問題についてお話を伺いました。聖書の記述や長い歴史が深く関係しているこの問題について、問題解決は大変難しいと思わされる一方で、実際に爆撃を受け命を奪われる人々の立場を思い、理不尽な戦争が一日も早く終わることを強く祈らざるを得ませんでした。

《先週の集会》

	ジュニア	シニア	妙の大人	計
C S 朝礼拝				
	礼拝堂	オンライン		献 金
主 日 礼 拝				
地区 2.11.集会	6 (前橋教会より)			

《メッセージ》「非常識な信仰」

列王記下 4:32-37, マルコ 2:1-12(2 月 8 日)

▼信仰とは、時にとんでもない行動へと人を駆り立てるものでもある。▼旧約は預言者エリシャの物語。エリシャの活動を支援した裕福な女性に、エリシャは何か感謝の思いを込めて「来年の今ごろあなたは男の子を抱えているであろう」と予言した。夫との間に長く子が与えられていなかったことを聞いたからだ。▼預言通り子どもは生まれ女性はその喜んだが、その子がある日突然死んでしまう。彼女は「私が子どもを求めたでしょうか。こんな目に遭うくらいなら子どもなど生まれたい方がよかった。」と激しく抗議した。エリシャはその子の上に覆いかぶさった。するとその子は息を吹き返した。「死人のよみがえり」の奇跡である。▼母はエリシャに猛烈に抗議した。しかしそれは子どもを愛するが故であった。それを受けてエリシャは奇跡を起こした。それは母の子を思う心、そしてその思いを受けとめ寄り添うエリシャの心が起こした奇跡だと言えよう。「死人の復活」を願うという常識外れの願いを叶えたのは、不思議な超能力ではなく、愛の力だったのである。▼新約はイエスによる癒しの奇跡の物語。これまでイエスが行ってきた様々な癒しが評判となり、訪問先には次々に人が押し寄せた。そこに一人の中風の男が連れられてきた。脳卒中などで半身が動かなくなった人である。▼身体の自由が利かない...それだけでも辛いのに、「あの病気になったのは彼自身の罪の故だ」という宗教的な価値観が精神的にも苦しみを与えていた。しかし彼はよい心がけで、「よし、それならオレたちがイエスさまのところに連れて行ってやろう」と床の四隅を担いで連れて来てくれたのだ。▼ところが家についてみると大勢の人で中にはとても入れない。そこで彼らは思いもよらない行動に打って出る。何と家の屋根に上り、屋根を剥がし、空いた穴から仲間の病人を釣り降ろしたのである。▼それは「非常識な」行動であった。しかしその非常識な振る舞いの中に、イエスは「彼らの信仰を見た」と記される。友人のことを思うが故に無茶な行動を取る彼らの中に、その友人への深い愛を感じ取られた。それがイエスの心の琴線に触れて、「あなたの罪は赦された」と言われた。「病気は罪への報いである」という価値観を、イエスは覆されたのだ。▼人間社会は長い時間をかけてルールや秩序、常識といったものを築いてきた。それらを守って生きること、人間関係のトラブルも未然に防ぐことができる。だからそれらを守ることは大切な振る舞いだ。しかし時にはそのような秩序や常識を超えて働く信仰というものがあるのだ、ということ、今日のエピソードは示してくれる。▼一見非常識に見える行為であっても、その出発点に隣人への愛があるなら、イエスはそれを受けとめ祝福される。逆に言えば、どんなに常識的で立派な振る舞いでも、「そこに愛がなければ私は無に等しい」(1 コリント 13 章)のである。